

高慢と偏見を読む 広野由美子 著
NHK 出版

1813年 出版 イギリスの特質を表現した

「古き良き時代の英国メリトン村での物語」

「私が一番大切に思うことは、、、

思いやり、敬意、寛大さ、そして正直さ

身分が高かろうがそれは変わらない」

ジェイン・オースチン 作

幸せな結婚に終わる日常ドラマ→オースチンの当然のセオリー

女性は従順であるべきだとされた時代にありながら、エリザベスは珍しく自主性に富んだ女性だった。ある日舞踏会で資産家のダーシーと知り合うが、彼の高慢で尊大な態度に反感を抱く。彼からのプロポーズも頑としてはねつけたエリザベスであったが、ある出来事から自身が抱いていたダーシーへの反感は、第一印象で「嫌な奴」だと決めつけた偏見によるものだったと気づき、、、。

「高慢と偏見」と言えば、BBC 製作のコリン・ファース主演のビデオがありますが、長い間、このビデオが製作されるまでは、ローレンス・オリビエのダーシー役が余りにも印象深く、上品なダーシーが描かれている。今回の TV 放映は前者のビデオのようですが、書庫の奥から探し出したビデオを再視聴しました。モノクロ映像です。

ベネット夫妻と 5 人の姉妹

ベネット氏 知性に富み、皮肉屋

ベネット夫人 感情的性格、おしゃべり

長女 ジェイン ー♥□ー 資産家 ビングリー

(ジェーン) 妹 2 人 キャロライン、?

次女 エリザベス ー✖□ー 高慢な大富豪ダーシー

(リジー) 妹 ジョージアナ

三女 メアリ キャサリン・デ・バーク夫人の甥にあたる

四女 キティー

五女 リディア → ウィッカムと駈落ち、その後、ダーシーの計らいで結婚

1、偏見の生まれる背景

エリザベスの偏見とダーシーの高慢さ

エリザベスとコリンズ(ベネットの甥)

限定相続制/長子相続制により、ベネット家の相続人
同じく偏見と高慢さと卑屈、尊大、卑下、滑稽、変人
成り上がり意識、共通、同類の身分

リジーは、コリンズのプロポーズを断るが、懲りない性格のコリンズである

キャサリン・デ・バーク夫人の言いなり、ハンズフォードの聖職禄を得る
リジーに振られた後は、隣家で友人シャーロット・ルーカスと婚約してしまう

姉妹・エリザベスと軍人ウィッカムとの関係

美男子、好感男子

ダーシーへの偏見がウィッカムへの好感になる

ウィッカムは、ダーシー家の執事の子

ダーシーを見下す、付和、悪口、偏見持ち

ウィッカムも他の女性へ、リジーは、フラれる

夏目漱石 写実の泰斗と評価

「文学論」

漱石は、1900年、熊本第5高等学校赴任時に、文部省からイギリス留学を命ぜられ当地に赴く。研究課題は「英語」だったが、多少目的を変更する余地があったため「英文学」の研究に励み、留学後1年余りたった時、「根本的に文学とは如何なるものぞ」という問題に取り組み始める。1903年、帰国して東京帝国大学の講師に任命された漱石は、留学中に書き留めたノートを元に、英文学を講義した(～1905年)。その2年にわたる講義録に加筆・訂正して1907年、「文学論」として刊行した。

エリザベスの性質

「快活で冗談好きで、滑稽なことを楽しむ」明るい性格である一方で、ビングリーの二人の妹たちを鋭く観察し、批判的な目を持っている

安心感の欠如←母親から評価されていない

無力感からの失望←父親からは評価されているが

父親を乗り越える野心、成り上がる

スキーマ(信念の土台)→癖→自動思考
(成り上がる→認知の歪み→偏見をうむ)

ダーシーへの反感→偏見になる

2、英国社会、認識を深めるもの

階級制度

上流階級	ダーシー	年収、1万ポンド
		ビングリー 4千ポンド、資産10万ポンド
中産階級	ベネット家(ジェントリー)	
		2千ポンドの中産
下層階級	ウィッカム(将校、財産なし)	

当時の結婚の意味

「財産のある独身男性なら、妻を欲しがっているに違いないことは、普遍的真理である」=結婚に関する通年。哲学的命題でも何でもないと皮肉っている。

女性にとって結婚とは、人生において絶対に確保すべき要素である。

「教育があっても財産の少ない若い女性にとっては、結婚は、名誉を保ちながら生きていく唯一の道であり、たとえ幸せになれるかどうかは不確かでも、欠乏を免れるための最も望ましい方法だった」

19世紀の一般的な女性にとって、社会的地位と経済力を確保するには、通常、結婚という選択肢しかありませんでした。

結婚は、女性にとって、職業と同義語だったといえる。

プライドと偏見の絡み合いを自然に描いている

1775年 ジェイン・オースチン 牧師の娘
読書家の父親の書斎で育つ
ファースト・インプレッション
41歳で没 二度の恋愛 生涯独身、中産階級

「田舎の村の3、4軒があれば小説を書くための格好の題材になる」など制限の文学、日常の些細な人間関係から人間を描く

エリザベスの周りには、コリンズ、ウィッカム、ダーシーという3人の男性が登場。

エリザベスにとって、コリンズは恋愛の対象外、

ウィッカムは、適切な判断が出来ずに好きになった相手、

ダーシーは、偏見の眼で見ることによって徹底的に嫌いになってしまった男性

会話能力によって人物を描き分ける

コリンズは、キャサリン・ド・バーグ夫人やベネット夫人に滔々とおべっかを使うなど、口は立つけれども、他人の気持ちが読めないという点で、会話能力に致命的な傷を持っている。エリザベスの気持ちを全く無視して強引にプロポーズし、彼女をいら立たせてしまった。

ちなみに、会話能力のレベルではベネット夫人と同列である。

「彼女は理解力に乏しく、知識に乏しく、気分の不安定な女性だ。不満があると、自分が神経を痛めていると思い込んだ。彼女の一生の仕事と言えば、自分の娘を結婚させること、人生の慰めは、人を訪問して噂話をする事だった」。以後、語り手による辛辣なコメントは差し控えられますが、ベネット夫人自身が自らの会話でそれを体現していく。

たとえば、訪問と噂話だけが慰めであるはずの彼女が、娘たちに向かって「私たちくらいの年齢になると、毎日新しいお付き合いをするなんて、そう楽しいことじゃないのよ。でもあんたたちのためだから、何でもできるのよ」とまことしやかに語る。また、彼女はルーカス家のことを「人のことはそっちのけで、わが身の事ばかり考える隣人」と呼んで酷評するが、この非難は誰よりもまず彼女自身に当てはまる。このような調子で、ベネット夫人の会話はことごとく自家撞着ぶりを示している。

全知の語り手が登場人物について簡単にコメントし、そのあと本人の言動がその寸評をありありと体現する、という形式、これは、オースチンのアイロニーの仕掛け型の一つ。コリンズやベネット夫人は、作中では徹底的に平板で喜劇的な人物に仕立てられている。彼らには、のちにエリザベスやダーシーに起こるような人格的な成長は生じない。オースチンは、こうした人物には会話の能力を付与せず、それによっていっそう彼らの劣等生を強調している。

ウィッカムの会話は、コリンズよりは一段レベルが上です。作り話をエリザベスに信じ込ませる手並みは見事ですし、このあとも、かれは様々な女性を言葉巧みに誘惑する人物であることが、あかされている。しかし、彼は会話を自分の策略の手段としてしか使いません。そういう意味では、ウィッカムは、コ

リンズより頭脳レベルが高いものの、言葉で真実を伝え、他者との「対話」をしようという態度が欠落していると言えます。

ダーシーの会話能力はさらに上のレベルです。エリザベスとダーシーは、物語の中で知的な会話を幾度も交わします。

ジェインとビングリーの恋愛が「一目ぼれ」であるのと対照的に、エリザベスとダーシーの恋愛は、ほぼ理詰めの会話から成り立っている。要所要所で二人が交わす会話が、彼らの恋愛の段階的な発展を跡付けている。

まずは、ジェインがネザフィールド屋敷に行った際に風邪をひき、エリザベスが看病に付き添っているところへ、ベネット夫人がやってくるという場面。ベネット夫人は、メリトンの舞踏会でエリザベスが軽んじられたことを根に持って、ダーシーに対してあからさまに食って掛かったり、ビングリーの気を引くために、ジェインが十五歳の時にある男性から美しい詩を送られたという自慢話をまくしたてたりします。恥ずかしくなったエリザベスは、何とか母親を黙らせようと、詩を送った男性の話を引き取ります。

「そして、彼の恋もお仕舞い」とエリザベスはたまりかねていった。「そういう風に詩を書いて恋を克服した人が、今までにたくさんいたでしょうね。詩には恋を追う払う効き目があるってことを最初に発見した人は誰なのかしら！」

僕は、詩は恋の糧になると思っていました」ダーシーは語った。

「強くたくましい本物の恋なら、そうかもしれません。強いものは、何でも養分にしてしまうでしょうから。でも、ちょっと好きという程度の弱弱しい気持ちなら、上手なソネットを一つ書いただけで、消えてしまうでしょう」と

ダーシーのいう「詩は恋の糧」というのはシェクスピアの「十二夜」にある「もし音楽が恋の糧ならば、、、、という言葉から引かれたもの。これはかなりの教養を要する高度な会話です。それに加われるのは、その場のメンバーの中ではエリザベスとダーシーだけで、他の人たちは会話についていけません。二人はここで、互角の相手として認め合います。しかも恋愛にまつわる会話を交わしつつ、ひそかにつながり始めたと言えるでしょう。

次に注目したいのは、ネザフィールド屋敷での舞踏会です。ここでエリザベスとダーシーは初めて一緒に踊るのですが、二人はこの時も、互角の会話を交わします。しかもその内容は、決して穏やかなものではありません。踊るつもりはなかったのに、ダーシーから突然の申し込みに驚いて、「われ知らずつい承諾してしまった」というエリザベスは、ここでダーシーにウィッカムことを話します。ダーシーの顔色が変わったことを見逃さなかったエリザベスは、ウィッカムに吹き込まれた情報をもとに、彼に対してこのように挑んでいきます。

「ダーシーさん、あなたはめったに人を許さない。いったん怒りが生じたら収まらない、と前におっしゃっていましたがね。多分、怒りが生じることに關しては、十分慎重にしていらっしゃるんでしょうね。」

「そうです」と彼はきっぱりと答えた。

「それに、偏見で目が曇るなんてこともないようにしていらっしゃるでしょう」

「そう願いたいものです」

「自分の考えを変えないような人は、最初にちゃんと正しい判断をすることが、特に必要ですわね。」

エリザベスは皮肉のつもりでこう言っているのですが、ここで彼女自身が自己矛盾を犯していることに気づいていません。ウィッカムの言うことを妄信してダーシーの偏見を強めたエリザベスは、まさに自分が「偏見で目が曇り」、「最初にちゃんと正しい判断をする」ことができているのです。

ダーシーとしては、エリザベスに魅了されているところへ、一番嫌なウィッカムの話題を出され、しかも自分に対して持って回った含みのある言い方をぶつけ合って接近していくさまが窺われる場面です。

恋愛小説では、初めて二人が手を取り合うようなシーンが重要になる場合がよくありますが、エリザベスとダーシーの場合はそうではありません。踊ったことよりも、むしろ「会話を交わした」ということの方が、二人の関係の進展にとっては重要な意味を持つのです。

エリザベス　ダーシーの会話は、偏見と高慢さで、いつも 対立してしまう
「あなたの欠点は、だれのきとでも憎んでしまうと言う性質ですね」

「そしてあなたの欠点は、人の言うことをわざと誤解する性質ですね」とダーシーは微笑んで答えた

そして

ベネット夫人の暴走としゃべくり

ネザフィールドを去る

突然、ビングリーが去る 妹から連絡

さらに、エリザベスとダーシーの対決関係深まる→対決としての恋愛
エリザベスの毅然とした態度に、ダーシーは、惹きつけられていく。

3、恋愛のメカニズム

エリザベスとダーシーの高慢と偏見の対決関係→エリザベスの媚びない態度、無意識の戦略から、ダーシーの恋愛意識の芽生え(偏見から恋愛へ) スキーマ(自動思考)から読み解く欲望の戦略

ミス・ディングリー(妹)への訪問(ジェインのディングリーへの思いから)→ダーシーへの思い→

ダーシーとエリザベスを引き裂くが、墓穴を掘り、失敗に終わる

→ディングリー家がロンドンへ去るという手紙

ジェインおちこむ

コリンズ、隣家の友人シャーロットと婚約

ダーシー、エリザベスの絡まる関係へ

ジェインとビングリーの破綻は、ダーシーが原因？で引き裂いたと言う

ダーシーの告白、状況の解説

↓高慢

ことばの対立

↑偏見と怒りをぶつける

エリザベス

(成り上がりの意識、偏見、攻撃性)

隠された意味

プライド:誇り、自尊心、満足感、思い上がり、自惚れ、高慢、傲慢
エリザベスは、内的、ダーシーは、外的意識に根ざす

プレジャディス:偏見、先入観、毛嫌い、えこひいき

4、最悪のプロポーズをからHappyエンドへの展開

虚栄心→ほこりの狭間

vanity

Too much pride

二人のこじれた関係

自分のプライドの愚かさを悟り反省するが、

エリザベスの新たな虚栄心が芽生える

「このペンバリーの奥様になったらさぞかし素晴らしいと思った」「私はこの場所の女主人になっていたかも知れない」→虚栄心

最愛の妹を紹介され、自分が愛されていることを悟る

5、

ダーシーからの手紙を受け取る

どうしても弁明したい

ジェインとビングリーは、誤解であったこと

さらに、ダーシーが、ウィッカムの虚言にもかかわらず援助していることを知る

↓

いままでの虚栄心と誇りを反省し

↓

優しい感性が湧き上がってくる

偏見のないダーシーが戻り

↓

怒涛の展開で、彼が変わったことを知る

また、新たな虚栄心が芽生えた

↓

愛のめざめ

ガーディナー夫妻のお供でペンバリーのダーシーの居所を訪ねる

ダーシーの 肖像画を前に優しい心が芽生える→新たな虚栄心が芽生える

ダーシーの紳士的な優しい変身→なぜ変わったのか

6、

リディアとウィッカムの駆け落ち→家族の醜態→ダーシーの機転で結婚させ

た→ベネット家の名誉が守られ、誤解が溶けた→希望が見えた

「彼女は初めて自分の願いがわかった。いくら愛しても無駄となってしまったいま、自分は彼を愛せるのだとわかったのだ」

→失ったものを自覚すると同時に新しい何かを発見する

→真の愛に目覚める瞬間を「どん底」に設定している

ジェインとビングリーの復縁

ダーシーの叔母、キャサリン・ド・バーグ夫人の結婚阻止に対し
エリザベスはプライドを傷つけられ、反論→夫人は、エリザベスの気持を認める

ダーシーの訪問、ダーシーへお想いの芽生え、→プライドと知性によりダーシーのプロポーズをうける

エリザベスの成り上がり(プライド)の勝利へ

皮肉を重ねつつ物語を動かしていくという見事な技→ジェイン・オースチン

エリザベスのはなし、「私は、笑っちゃいます」(リディアのキメ台詞)→ハッピーエンド

高慢と偏見を克復していく物語でした

美德が報われて幸せにという物語が当時流行していた。

「悪徳」も含めた人間の本質をオースチンは描きたかった